

野尻湖遺跡群における先土器時代の石器石材

谷 和隆

I はじめに	V 石材の選択
II 野尻湖遺跡群の概要	VI 石材の搬入形態
III 石器石材の産地	VII 黒耀石原産地と野尻湖遺跡群
IV 石材利用の変遷	VIII まとめ

I はじめに

野尻湖西岸から南岸にかけの帯は、多くの先土器時代の遺跡が密集する野尻湖遺跡群として知られている。1993年から1995年にかけて上信越自動車道建設に伴う緊急調査が（財）長野県埋蔵文化財センター（以下、当センターと略す）によっておこなわれた。これまでのトレンチ中心の調査では、1つの石器群の部分しか見えなかったが、幅数十mにも及ぶ高速道の調査によって、1つの石器群全体の姿が見えるようになってきた。それに伴い石器石材についても1つの石器群における量や構成比がわかるようになってきた。

石はかつてには移動しないので、石の動きには必ず人が伴う。したがって、当時の集団の移動や生産活動を知る上で、石材の産地と消費地の研究は重要となる。本稿では当センターの調査成果を中心に野尻湖遺跡群における石器石材についての考えを述べさせてもらう。

II 野尻湖遺跡群の概要

本州中央部の日本海よりに位置する野尻湖は西に黒姫山、北西に妙高山、東に斑尾山に囲まれる場所に位置する。野尻湖の西岸から南岸にかけの丘陵地に南北7km、東西5kmの広がり範囲に、先土器時代～縄文時代草創期の遺跡が39確認されており、野尻湖遺跡群と呼ばれている。分水嶺が遺跡群内にあり、北は池尻川を経て関川から日本海へ、南は鳥居川を経て千曲川（信濃川）から日本海へと流れ込む。

第1図に当センターで調査した野尻湖遺跡群の遺跡の概略をしめした（註1）。先土器時代（註2）に該当する層序は上位からⅢ層（漸移層）、Ⅳ層（黄褐色ローム層）、Ⅴa層（黒色帯漸移層）Ⅴb層にあり、Ⅴa層にATの極大値が存在する（註3）。

石器群の時期をATの降灰を境に、大きく2つの時期に分けることとする。

AT降灰以前は主としてⅤbで検出され、石斧・台形様石器を代表とする石器群である。石斧、台形様石器の出土量は日本列島でも有数であり、遺跡規模も大きな遺跡が存在する。日向林B、東裏、大久保南ⅣG区、貫ノ木3区がここに含まれる。

AT降灰以降はⅣ～Ⅲ層から検出され、ナイフ形石器を代表とする石器群である。国府系、

遺跡名・地区	出土層位	遺物点数	主な石器組成	遺跡の特徴
七ツ栗	III～IV	約1,000	Kn.Gr.S-Sc	杉久保系石器群
日向林B	V b	約9,000	Ax.Tr	大量の石斧, 環状ブロック群
大平B	IV	約1,000	Kn.E-Sc	サイコロ状の石核
裏の山	IV	約7,700	Kn.E-Sc.	茂呂系石器群
東裏1区	V b	約700	Ax.Kn.Tr	縦長剥片主体
東裏2区	2次堆積	約4,000	Po.Kn.E-Sc	大量の搔器
大久保南 4G区	V a～V b	約800	Ax.Kn.Tr	石斧と基部加工ナイフ形石器
貫ノ木1区	IV	約1,500	Po.Kn.E-Sc.Gr	槍先形尖頭器と基部加工ナイフ形石器
貫の木3区	V b	約9,000	Ax.Tr.Kn	大量の石斧と砥石 多様な台形様石器
西岡A	IV	約3,300	Kn.Tri.Po	国府系石器群

石器器種凡例：Knナイフ形石器，Po槍先形尖頭器，Tr台形様石器，Ax石斧，E-Sc搔器
S-Sc削器，Gr彫器，Tri角錐状石器

第1図 各遺跡の概略

杉久保系，茂呂系石器群と列島各地の様相がみられる。七ツ栗，大平B，裏の山，東裏2区，貫ノ木1区，西岡Aが対象となる。

III 石器石材の産地

現在，野尻湖周辺で採取できる岩石はいずれもきめの粗い岩石ばかりで，とても石器石材としては使えないものである。したがって，大量に存在する石器類すべてが原石から製品を作成する過程中的，どこかの段階で持ち込まれたものであるといえる。ここから野尻湖遺跡群が純粹な石器消費地であるということがいえる。

野尻湖遺跡群で使用されている石材の産地について中村由克氏がまとめたもの〔中村1995〕を参考にして第2図の表にまとめた。すべての石材について産地同定がなされているわけでは

岩石名	産地	距離
黒耀石	和田峠・星糞峠・星ヶ塔・麦草峠・冷山	100km
珪質頁岩	五十嵐川上流・破間川上流・清津川上流・魚野川の小出町付近・三国峠付近	50km
無斑晶質安山岩	関田山地	30km
蛇紋岩	姫川下流域～日本海岸	50km
玉髓	新潟県信濃川支流	50km
チャート	北アルプス南部	100km
砂岩	笹ヶ峰	20km

第2図 石器石材の産地と距離

ないが、ここで示されているよりも近い産地は確認されていない。つまり、確認されている最も近い産地が示されているということで、さらに遠い場合も考えられる。

黒耀石については望月明彦氏に依頼して蛍光X線分析をおこなった結果を第3図に示した。和田峠系は和田峠周辺、星糞峠、霧ヶ峰系は星ヶ塔、男女倉系は男女倉、蓼科系は麦草峠がそれぞれの代表的な地点として知られている。和田峠系がほとんどをしめる日向林B・大久保南

遺跡名	和田峠系	霧ヶ峰系	蓼科系	男女倉系	分析数
日向林B	561	11	23	0	595
貫ノ木3	244	130	4	1	379
大久保南	472	18	1	0	491

第3図 黒耀石の産地

と和田峠系に霧ヶ峰系が多く入る貫ノ木が対照的であるが、いずれも信州産の黒耀石であった。

第2図で示した以外にも、水晶や下呂石と思われる石器も出土しており、かなり遠くからも石が入ってきている。しかも、黒耀石は南、珪質頁岩と無斑晶質安山岩は北東、蛇紋岩は北西からといったように多方面から石が入ってきており、まるで各地から人々が集まってきたような様相を示している。

石のないところに多方面から大量の石材が持ち込まれていることは、野尻湖周辺が重要な要素をもった場所であったと考えられる。

IV 石材利用の変遷

各遺跡で出土した石材の組成を第4図に示した。AT上位と下位で石材が大きく変化する。

遺跡名	黒耀石	珪質頁岩	安山岩	玉髄	チャート	蛇紋岩
七ツ栗	△	△	◎			
貫ノ木1	○	○	○			
西岡A		△	◎			
東裏	○	○	○		○	
大平B	○	○	○		○	
裏の山	○	○	○		○	
大久保南	◎					△
貫ノ木3	◎		○			△
日向林B	◎			○		△

凡例：◎50%以上 ○多い △製品に多い

第4図 各遺跡の石材組成

AT下位の日向林B、貫ノ木3区、大久保南IVG区はいずれも石斧を多く出土する石器群であるが、黒耀石が50%以上つかわれている。黒耀石以外には無斑晶質安山岩や玉髄が用いられ

る場合が多く、珪質頁岩の利用はAT上位と比べると少ない。また、石斧の石材には蛇紋岩が多用される。

AT上位の裏の山、大平B、東裏、西岡A、貫ノ木1区、七ツ栗では黒耀石、珪質頁岩、無斑晶質安山岩が主として用いられ多様化する。七ツ栗、西岡A遺跡以外の遺跡では1つの石材に偏ることはなく、複数種の石材が用いられている。

南関東ではAT下位での黒耀石の利用は少なく、AT降灰前後から利用率があがることが指摘されている〔稲田1984、金山1995〕。その点で野尻湖遺跡群は南関東とは異なる様相をしめている。

V 石材の選択

石器の器種や時期の違いによって、使用される石材が異なることがいえる。AT下位では石斧には蛇紋岩が選択され、台形様石器やナイフ形石器には黒耀石が選択されている場合が多い。黒耀石製の石斧や蛇紋岩製の台形様石器はなく、先土器時代の古い時期から石材の使い分けがあったことがうかがえる。また、黒耀石製の台形様石器に蛇紋岩製の石斧がともなうのは、野尻湖遺跡群では一般的なあり方であるが、両者の産地は南と北西ではほぼ逆方向に存在しており、当時の人々の活動範囲が広がったと予想できる。

AT上位では石材が多様化することは前記したが、石器群によって好んでつかわれる石材があるようだ。国府系のナイフ形石器には無斑晶質安山岩がつかわれ、杉久保系のナイフ形石器と彫器には珪質頁岩と無斑晶質安山岩がつかわれることが多い。その他、茂呂系のナイフ形石器や搔器、槍先形尖頭器には黒耀石と無斑晶質安山岩が多く使われている。

VI 石材の搬入形態

各石材がどのような状態で持ち込まれているのか、第5図に示した。

石材	AT下位	AT上位
黒耀石	礫	製品・剥片
珪質頁岩	少ない	製品・剥片
無斑晶質安山岩	礫・分割礫	礫・分割礫
蛇紋岩	製品	なし

第5図 石材の搬入形態

AT下位の黒耀石は礫面を残す剥片が多く出土し、石核が多く出土する点から、原石で持ち込まれた可能性が高いと思われる。大久保南遺跡で発見された黒耀石集中は、大形の縦長剥片と石核から構成されているが、礫面の残存状況から原石が持ち込まれたことが考えられる点は象徴的である。AT上位になると、黒耀石の利用率が下がることは前記したが、製品だけみても全体の構成比よりも、製品の構成比は高くなる。黒耀石のブロックも多数検出されているので石器製作が行われているのは確かであるが、製品もしくは石刃などの素材の状態で持ち

込まれていることが、考えられるのではないだろうか。

珪質頁岩はAT下位での利用率は低く、黒耀石のように大量に持ち込まれていることはない。断片的に見られる珪質頁岩には製品が目立つ。AT上位においては黒耀石、無斑晶質安山岩同様に主要な石材の1つになる。黒耀石同様にブロックは存在するものの、石核や礫面を残す剥片の出土は少ない。こちらも別の遺跡で、1次的な加工が行われてから持ち込まれたものが多いと考えられる。

黒耀石、珪質頁岩と異なる様相を示すのが無斑晶質安山岩である。AT下位、上位の両方の時期をとおして安定して利用されている。いずれの時期も、原石もしくは原石を分割したものが遺跡に搬入される場合が多いようである。したがって、剥片数が多い割には製品が少ない傾向が認められる。また、大形の石器に無斑晶質安山岩製のものが目立つ。これは、他の石材と比べ産地が近く石材を獲得しやすいことから、在地的な石材として扱われた要素が考えられるのではないだろうか。

製品もしくは素材の形で搬入されるものがある点を指摘したが、もっとも製品で持ち込まれる傾向が強いのが蛇紋岩製の石斧である。野尻湖遺跡群での石斧の出土総数は138点（註5）と他地域にくらべ圧倒的に多いが、いずれの遺跡においても石斧製作址は検出されていない。そのため、1次的に製作された後に製品もしくは、それに近い形で遺跡群に持ち込まれていることが予想される。

VII 黒耀石原産地と野尻湖遺跡群

石器の一生を、原石の採集、石器製作、石器の消費の3つにわけて考えることとする。石器製作は1次加工、2次加工、3次加工以上とさらに細分することができる。原石の採取は必ず石材原産地で行われ、石器の消費は石器消費地でおこなわれる。この場合石材原産地と石器消費地が同じ場所である場合も考えられるが、野尻湖遺跡群の場合、石材産地がないために石材の採取はおこなわれない。

時期や石材によって様相が異なり、そのあり方は複雑であるが、科学的な分析がおこなわれ産地が比較的確な黒耀石について考えてみることにする。

AT下位の黒耀石については具体的な分析が進み、ほとんどが信州産の黒耀石が用いられていることが確認されている。AT上位のものに関しては科学的な分析はほとんど行われていないが、地理的位置と黒耀石の質から考えると多くが信州産の黒耀石と判断できる。したがってATの下位と上位ともに原石の採取された地域と石器が消費された地域が同一と考えられる。

野尻湖遺跡群での黒耀石の搬入はAT下位では原石で持ち込まれることが多く、AT上位では製品もしくは素材の形で持ち込まれる場合が多いことを前記したが、これをどのように理解するか考えてみることにする。

AT下位では原石の採取が原産地で行われ、そのまま野尻湖遺跡群に持ち込まれていると理解できる。石器製作は1次的な製作段階から製品にいたるまでのすべての石器製作が野尻湖遺跡群でおこなわれており、石器の消費もおこなわれている。

AT上位では原石の採取が原産地で行われ、野尻湖遺跡群に持ち込まれる前に他の場所で石器製作が行われ、製品や素材の形で持ち込まれている。野尻湖遺跡群では石器製作の途中の段階から完成品にいたるまでの過程と、石器の使用、欠損品の再生といった石器の消費が行われていたと考えられる。

黒曜石原産地では、AT下位の遺跡数は少なく、いずれも小規模である。それに対しAT上位になると男女倉遺跡群や鷹山遺跡群といった非常に大規模な遺跡群が原産地一帯に形成されている。これを野尻湖遺跡群と結びつけて考えると、AT下位の原産地では黒曜石採取後、石器製作をおこなわずに原石のまま持ち出し、消費地で石器製作をおこなったため、原産地には最低限の遺跡しか残されなかったのではないだろうか。AT上位の原産地では石材の採取以外に石器製作という活動がおこなわれるようになったため、大規模な遺跡群が形成されるようになったのではないだろうか。つまり、AT下位では消費地からの石材獲得が直接的におこなわれてのに対して、AT上位になると原産地で石器製作をおこない、製品や石器の素材を搬出するようになったため、間接的に石材が獲得されるようになったのではないだろうか。

AT上位において黒曜石は野尻湖遺跡群だけではなく、関東をはじめとする周辺地域に搬出されている。そのため、黒曜石製の製品もしくは石器の素材は当然それらの地域にも搬出されていたと考えられる。

VIII まとめ

当センターで調査された野尻湖遺跡群の石器石材について触れさせていただいたが、いずれの遺跡も本格的な整理作業がはじまっておらず、現時点では深く踏み込めない部分が多々ある。

今後の課題は多い。遺跡内での母岩別資料の分析や接合をすすめれば、遺跡の構造がみえてくるだろうし、そうなれば遺跡相互の関係や遺跡群全体もみえてくるだろう。また、さらに細かい石材産地の追求も、当時の集団の移動を解く1つのポイントになると思われる。

最後になったが、黒曜石の蛍光X線分析をしてくださった望月明彦先生、日頃からご指導、ご助言をいただいている中村由克氏、大竹憲昭氏には記してお礼を申し上げる。

註1 いずれの遺跡も未整理の段階であり、細かい部分は今後の整理作業によって変更もありうる。

註2 ここでの先土器時代とはヨーロッパの後期旧石器時代に相当する時代であり、前期旧石器時代は含まれない。

註3 AT（始良丹沢火山灰）は遺物の出土する陸上の遺跡では純層では確認できないものの、分布の極大値はV a層になることが、分析によって明らかになっている。

註4 珪質頁岩には珪質凝灰岩も含まれている。両者は粒子が火山灰かそうでないかの違いであり、肉眼観察での両者の判別は極めて難しいものが存在する。同じ岩帯中に両者が存在する場合もあるため、考古学的には産地が同じ地域で、割れかたが同一であることから両者を含めて珪質頁岩とした。

註5 （財）長野県埋蔵文化財センターの調査で日向林B54点、貫ノ木（高速道の調査）32点、大久保南23点、東裏（高速道の調査）13点、裏の山1点の合計128点の出土、信濃町教育委員会、野尻湖遺跡調査団の査では貫ノ木成文堂地点で4点、貫ノ木金氏住宅地点、貫ノ木B、東裏、仲町、西岡Bで各1

点ずつの9点, 他に杉久保遺跡で1点の合計138点の出土。

参考文献

- | | | |
|-------------|------|--|
| 稲田 孝司 | 1984 | 「旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程」『考古学研究』30-4 |
| 金山 喜昭 | 1995 | 「関東地方における黒耀石の利用と交流について」『第8回長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』長野県旧石器文化研究交流会 |
| 中村 由克 | 1986 | 「野尻湖・信濃川中流域における旧石器時代遺跡群と石器石材」『信濃』38-4 |
| 中村 由克 | 1995 | 「長野・新潟における石器石材について」『石器石材』第3回岩宿フォーラム予稿集 |
| 中村 由克 | 1996 | 「野尻湖遺跡群研究の現状」『第8回長野県旧石器文化研究交流会—発表資料—』長野県旧石器文化研究交流会 |
| 野尻湖人類考古グループ | 1994 | 「野尻湖遺跡群における文化層と旧石器文化」『野尻湖博物館研究報告第2号』信濃町立野尻湖博物館 |